『言葉集』注釈（六）

小林　賢太・穴井　潤＊・中村　文＊＊・持田　玲＊＊＊

はじめに

本稿は、平安末期に惟宗広言が編纂した私撰集『言葉集』の注釈である。これまで巻第十五・雑下部および巻第十四・雑上部冒頭部に注釈を施しており、本稿は「言葉集（五）」（『埼玉学園大学紀要人間学部篇』二二、二〇二三年十二月）の続編として書かれたものである。

凡例

本稿は、冷泉家時雨亭文庫蔵『言葉和歌集　下』（冷泉家時雨亭叢書　第七巻『平安中世私撰集』所収、朝日新聞社、一九九三年）を底本とする翻刻本文を掲げ、それぞれの和歌について、【整定本文】【本文に関する注】【現代語訳】【他出】【詠出機会】【作者】【語釈】【補説】の各項を立て、適宜注を施したものである。歌番号は『新編国歌大観』第十巻所収『言葉和歌集』に従った。今回は雑上部238～244番歌を取り上げる。各歌の注釈の末尾に、それぞれの担当者を（　）内に示した。担当者は輪読時に報告を行い、四者による議論を踏まえて原稿を執筆した。注釈の内容については、各担当者が責任を負う。

翻刻本文は、改行等をも含めて、できうる限り底本の原態を残すよう努めた。虫損等で判読が困難な文字は□で示し、字体の推定が可能な場合には、□の右傍に「（〇歟）」として示した。ミセケチ記号は「ヒ」に統一した。

【整定本文】詞書・和歌ともそれぞれ一行書きに改め、濁点・句読点を付し、歴史的仮名遣いに改めた。判読が困難な箇所で推定が可能な場合には、推定した文字を示した。

【本文に関する注】重書や反転を指示する記号等、翻刻では示しきれない本文上の特徴について記した。

【現代語訳】できる限り本文に忠実な通釈を試みた。言葉を補った場合には（　）内に記した。

【他出】『言葉和歌集』所収の和歌が、他の文献（南北朝期以前）に見える場合に、これを示した。和歌作品に見える場合は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。それ以外の文献については、それぞれ典拠を示した。

【詠出機会】当該歌が歌合・歌会・定数歌等の和歌行事において詠出されたものである（含推定）場合に、伝存する歌合本文や諸歌集などの資料によって知りうる情報を示し、参考文献を掲げた。

【作者】当該和歌の作者に関して簡略に解説し、参考文献を掲げた。

【語釈】和歌の解釈に必要な語句や、特に注意すべき事項に関する解説を示した。

【補説】和歌の作意や現代語訳には示しがたい含意、また、集内における配列意識や政治社会など時代性との関連や和歌史上における意義等について記した。

なお、古典作品の引用に当たっては、韻文については特に注さない限り、『新編国歌大観』に、散文については、『日本古典文学大系』、『新日本古典文学大系』（以上、岩波書店）、『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。表記等については改変する場合がある。

讃□（岐歟）院マサセ給テ後大内ノ
サクラヲオリテ八条院ノヒメ
宮ト申ケル時マイラセテオ
ハシマシケルヲ御返事イカヽ
アルヘキト仰事アリケレハ
ヨミテマイラセラレケル
　前左兵衛督惟方
238　コヽノヘノクモヰニミエシサクラハナ
　オリテハマサルニホヒナリケリ

【本文に関する注】歌本文三句「ク」は重書。

【整定本文】

讃岐院マサセ給テ後、大内ノサクラヲヲリテ、八条院ノヒメ宮ト申ケル時、マヰラセテオハシマシケルヲ、「御返事イカヾアルベキ」ト仰事アリケレバ、ヨミテマヰラセラレケル
　前左兵衛督惟方
コヽノヘノクモヰニミエシサクラバナヲリテハマサルニホヒナリケリ

【現代語訳】

讃岐院がご在位でいらっしゃった(期間の)直後、南殿の桜を折って――八条院が姫宮と申し上げていた時――差し上げなさったところ、(姫宮から)「お返事をどのようにするべきか」との仰せがあったので、詠んで差し上げなさった
　前左兵衛督惟方
宮中の紫宸殿で目にした(八重より優れた)桜花。それは手折って(目の前に届いて)こそ、かつて見た時よりさらに素晴らしい美しさになっていることよ。そのように、かつて宮中で拝謁した新院は、譲位されたことでさらに素晴らしいご様子でいらっしゃることです。

【他出】○『粟田口別当入道集』一九
　新院くらゐおりさせたまひてのち、八条院姫宮と申しまゐらせしとき、さくらのはなをかめにさして宮の御かたへまゐらせさせたまひたりしを、女房たちいかが申すべきなどありしかば、かくぞおぼえ候ふと申す
ここのへの雲井にみえしさくらばなおりてはまさるにほひなりけり
○『治承三十六人歌合』別当入道寂信・四九
　崇徳院位おりさせ給へりける次の年の春、南殿の桜を折りて、八条院、姫宮と申しける時、奉らせ給へりける御返事に、歌つかうまつれとおほせければ
九重の雲井に見えし桜花をりてはまさる匂ひなりけり
○『和歌密書』「第一風哥」（紙宏行「〈解題と翻刻〉『和歌密書』（抄）」、『日本文芸論叢』第三号、一九八四年三月）
小野春道、延喜御門の御気色悪かりける比、所領の内、小野のいそのかみ寺に引篭りし時、内裏にてみしりたりし女房、都を出て密に其所へ行て、慰めん為にともに篭居したりけるか、我かく是にゐたるをは、いかゝおもひ給ふと云ければ、春道読たりし哥、すなはち言風也。
　九重の雲井に見えし桜花おりてはまさるにほひなりけり
○『三五記』「第一　風歌」（『日本歌学大系』第四巻、風間書房、一九五六年）
　九重の雲ゐにみえし桜花折りてはまさるにほひなりけり
○『古今和歌集大江広貞注（為相注）』「序注　六」（京都大学国語

国文資料叢書四八『古今集注　京都大学蔵』、臨川書店、一九八四年）

九重の雲井にみえし桜花おりてはまさる匂ひ也けり

【作者】藤原惟方→316**【作者】**

【語釈】○讃岐院　崇徳天皇→309**【作者】**。『粟田口別当入道集』公宴部は二首のみしか残っていないがいずれも崇徳院関係の歌会の歌である（一一〇番は歌欠）。ただし、崇徳院歌壇での歌会に惟方が参加した例は右の二例以外には見出せず、鳥羽院との紐帯によって参加したか（髙﨑由理「藤原惟方伝」『立教大学日本文学』五九、一九八七年一二月）。**○マサセ給テ後**　「マサ」は「あり」の尊敬、「セ」は尊敬の助動詞、「給テ」は尊敬の補助動詞と解するが、三重尊敬となるのは不審。強いて解釈すれば「おはします」のように「あり」の尊敬語が在位を意味し、その「後」なので在位していた後、すなわち退位後であることを表しているか。**【他出】**『粟田口別当入道集』『治承三十六人歌合』詞書には不自然な点は見えないため、「おりさせ」が誤写によって「マサセ」となったかと思われるが、本集本文を尊重して訳出した。**○大内ノサクラヲヲリテ**　宮中の紫宸殿南階下東側に植えられた桜、南殿の桜とも。「いまだ殿上をゆるされぬ事を歎き侍りしに、二条院の御時弥生十日比に行幸なりて南殿の桜盛りなるを一枝折らせて去年と今年といかがあると仰せ下され侍りしかば、枝に結付けてまゐらせ侍りける」（頼政集・八〇詞書）のように、枝を折って歌を添えて贈られていた。『粟田口別当入道集』によれば「かめにさして」贈られてきたとされる。「きみがよはのどかなるべしかめ山にさくらの花のにほひことなり」（大斎院前の御集・三二六「またの日、さいさうのきみ、さとよりはなびらおほきなるさくらをかめにさして」）。**○八条院ノヒメ宮ト申ケル時**　鳥羽天皇第四皇女の暲子内親王。生没年は保延三年（一一三七）～建暦元年（一二一一）六月二六日、七五歳。母は美福門院得子で、崇徳院・後白河院の異母妹、近衛天皇の同母姉である。久安二年（一一四六）四月十六日に准三宮となる。一一世紀末ごろの准三宮は天皇の姉妹への宣下が主流となり、五歳以下の幼年で行われることが多かった。その理由は内親王に対する上皇の鍾愛に基づくと考えられ、内親王にとって准三宮宣下は後の入内立后ないし院号宣下への出発点であったとされる（樫山和民「准三宮について」『書陵部紀要』三六、一九八五年二月）。暲子も後に二条天皇准母となり院号宣下を受け、以仁王・春華門院を猶子とした。詞書「姫宮」はこの准三宮宣下以前のことと推測される。鳥羽院鍾愛の娘で、相続した所領は八条院領として名高い。春華門院、順徳院へと継承され、後代大覚寺統の経済基盤となった。莫大な所領を背景に政治的に独立した空間を形成し、戦乱の世においても独自の立場を保った。暲子が姫宮であったころには鳥羽殿で歌会が催され、崇徳院・後白河院も参加していたことが諸歌集詞書によって知られる。前述の公宴部には「鳥羽院、とばのたなかどのにおはしましし時、八条院、姫宮と申しまゐらせしをり、新院、宮御かたにわたらせたまひて、人人めして、竹遐年友といふこころにて、御製にかさねくはへられて、講ぜられし中にめされて、そのよ、講師つかうまつりしかとよ」（粟田口別当入道集・一〇九詞書）と記される。惟方は、母が得子付きの女房であり、自身も永治元年（一一四一）一二月二七日から皇后宮権大進として得子に仕えていたため、当該歌が詠まれた時期に暲子の周辺に出入りしていたと考えられる。**○コヽノヘノクモヰニミエシサクラバナ**　「コヽノヘ」は、禁中を意味する「九重」の和訓で、「クモヰ」とともに宮中の意。「八重桜」に勝る「九重の桜」の意を掛けるとともに、「クモヰニミエシサクラバナ」と詠むことで南殿の桜であることも表している。「ミエシ」は下句に対応しており、直接過去によってかつて宮中で目にしたことを示す。**○ヲリテハマサルニホヒナリケ**

リ「ヲリ」は枝を折ることと、位を降りる（「オリ」）ことが掛けられている。「ニホヒ」は鮮やかで照り映えるような美しさの意。桜が手折られたことで一層美しさが増していると詠む。当該歌では崇徳院のもとから贈られてきたことへの謝意を示すことが主眼となっている。宮中で目にした桜の木よりも、手折られて贈られた桜の枝の方が一層美しいと詠むことで、いただいた桜を賛美する心情を表現する。なお、【整定本文】では「ヲリ」と訂したが、仮名遣いを改めずに「オリ」ととれば、「（かつて宮中で拝謁した崇徳院は）退位なされた後に一層素晴らしさが増している」という崇徳院への讃美を前面に出した歌と解し得る。前掲髙﨑論文が指摘するように、『粟田口別当入道集』本文ではこの解釈を採るべきである（【補説】）。

【補説】詠作時期は、崇徳院が譲位した翌年の永治二年（一一四二）春から、暲子が准三宮となる久安二年（一一四六）春までの間で、暲子が六～十歳、惟方が一八～二二歳ごろと推測される。『治承三十六人歌合』の記述を信じるならば永治二年（一一四二）春の詠か。

当該歌は『粟田口別当入道集』『治承三十六人歌合』にも収録されるが、詞書の差異によって詠歌状況が異なっている。大きな相違点は①崇徳院譲位、②大内（南殿）の桜、③八条院の仰せ、についての記述の有無で、『言葉集』では「崇徳院在位時の後に、大内の桜を折って姫宮（暲子）に差し上げたところ、惟方が姫宮の仰せによって詠んだ」と譲位を直接表さないかたちで記される。「大内―雲井」が結びつくことで宮中という〈場〉が前景化し、かつて見た南殿の桜を眼前の桜の枝によって想起する様が詠まれている。一方『粟田口別当入道集』では「崇徳院譲位の後に、桜を瓶に挿して姫宮に差し上げた時に、女房たちが返事に困っていたところ、惟方が詠んだ」と、大内の桜という情報が排され、かつ、暲子の仰せではなく惟方の自主性が強調される。「大内」という情報が欠けることで宮中という〈場〉には焦点が当たらず、「降り」によって詞書と歌が結びつき、崇徳院という〈人〉が前面に出てくる。『治承三十六人歌合』は概ね『言葉集』に近いが、「崇徳院譲位後」と明記している。両者の差異は、いただいた桜を賞美する立場で詠んだとみなすか、退位した崇徳院を讃美する立場で詠んだとみなすか、という一首全体の歌意に関わるとともに、【語釈】「〇ヲリテ…」項に記したように、「ヲリ（桜を折り）／オリ（位を降り）」のいずれの本文を採用するかとも連動する。『言葉集』では、姫宮の立場から代作し、以前に宮中で見た桜と現在贈られてきた桜を比較して贈られた桜の方がより美しいと詠んだ、崇徳院への感謝の歌と解すべきだろう。詠作時期からすると、暲子は命じるような年齢ではなく、『粟田口別当入道集』のようにお付きの女房からの依頼と想像される。

なお、【他出】に示したように、当該歌は歌学秘伝における六義注釈の「そへ歌」の例歌に転用され、為実流の『和歌密書』から『三五記』へ、さらに為相流の『大江広貞注』へと流伝したと想定できる（紙前掲論文、三輪正胤「為実流」『歌学秘伝の研究』風間書房、一九九四年、片桐洋一「『大江広貞注』とその周辺」『中世古今集注釈書解題　二』赤尾照文堂、一九七一年）。説話内容に拠れば、歌意は「はるか遠く、宮中でも見かけていた貴女の姿は、籠居先で間近に見ることができるようになると、一層すばらしく感じられる」といったものになり、女房の質問に対して、共に暮らす今の方がより美しいと返事をしたことになる。なぜこうした説話化を果たしたかは分明でないが、当該歌を「桜を人にたとえる歌」として享受しているのは注意される。前述の通り、『言葉集』本文では桜の賞美に主意があると解すべきだが、歌そのものが「桜＝人」の比喩を含意することから、この本文においても崇徳院讃美の意図を読み取るべきだろう。

（穴井）

籠居シテ侍ケルコロ南殿ノ
サクラサカリナリケルヨシ
ヲキヽテ女房ノモトヘイヒ
ツカハシケル
前左衛門督公光

239 コヽノヘニタヲリシモノヲサクラハナ
チルニ□（ハ歟）ヲタニフマヌカナシサ

【本文に関する注】歌本文二句目「リ」は重書。

【整定本文】

籠居シテ侍ケルコロ、南殿ノサクラサカリナリケルヨシヲキヽテ、女房ノモトヘイヒツカハシケル　前左衛門督公光

コヽノヘニタヲリシモノヲサクラバナチルニハヲダニフマヌカナシサ

【現代語訳】

籠居していましたころ、南殿の桜が盛りを迎えているということを聞いて、女房のもとへ言い送った　前左衛門督公光

（かつては花盛りに）宮中で手折っていたのになぁ、あの桜花を。（今は花びらが）散り積もる庭にさえ立ち入ることのない悲しさよ。

【作者】藤原公光。大治五（一一三〇）～治承二年（一一七八）。四九歳。父は閑院流権大納言季成、母は民部卿藤原顕頼女。姉妹に式子内親王・守覚法親王・以仁王らの母高倉三位成子がいる。長寛元年（一一六三）には従二位権中納言に至るも、仁安元年（一一六六）に解官され、復官することなく没する。解官の理由について、以仁王の元服に関わるとする説、後白河院・二条天皇の対立の影響という説、度重なる怠慢癖に起因するという説が出されているが、詳細は不明。不遇感による述懐歌が多く残る。『千載集』以下の勅撰集に八首入集。家集は伝わらない。和漢兼作の人であった。《参考文献》石川泰水「さりともと歎き歎きて過ぐしつる―藤原公光の生涯と和歌」（『国語と国文学』五九―二、一九八二年二月）

【語釈】○籠居シテ侍ケルコロ　**【作者】**参照。当該歌の詠歌状況は不明だが、解官された仁安元年以降の詠である。**○女房**　宮中に仕える女房。「後冷泉院御時、月のあかかりけるよ女房たちぐして南殿にわたらせ給ひたりけるに、にはのはなかつちりておもしろかりけるを御覧じて、これを見しりたらん人に見せばやとおほせごとありて、中宮御方に下野やあらんとてめしにつかはしたりければまゐりたるを御覧じて、あのはなをりてまゐれとおほせごとありければをりてまゐりたるを、ただにてはいかがとおほせごとありければつかうまつれる」（金葉集・春・六九詞書）のように、かつて宮中の成員で南殿の桜を愛でることがあったのだろう。**○コヽノヘニタヲリシモノヲサクラバナ**　「シ」は直接過去。「モノヲ」は詠嘆の終助詞で、実状に対する不満や後悔の念を含意する。かつて宮中で南殿の桜を手折ったことを回想している。九重の桜には「ここのへのくもゐのさくらおなじくはわがものにてもみるよしもがな」（忠盛集・一〇三「殿上さうさせ給ひけるころ、内裏の花を見て」）のように、禁庭の桜を見るという行為を介して、周縁から宮中へ思いを馳せる作例が見られる。「わするなよなれしくもゐのさくらばなうきみははるのよそになるとも」（隆信集・九「二条院、くらゐの御時、殿上のきて侍りしつぎのとしの春、臨時祭の舞人にてまゐりて、南殿のはなをみてつねに候ひしことなどおもひいでられて」）は慣れ親しんだ南殿の桜に、自分はよそ者になってしまったけれども忘れないで欲しいと詠みかけており、過日と現在の落差を歌う点が似通っている。**○チルニハヲダニフマヌカナシサ**　庭に桜が散り敷く様子は「あさごとに我がはくやどのにはざくらはなちるほどはてもふれでみむ」（近江御息所歌合・七「庭桜」）、「ふめばをしふまずはゆかむかたもなしちりつむにはの花桜かな」（赤染衛門集・四二五）の

ように散った桜の美しさによって庭に踏み入ることができないこと詠む。「ニハ」は紫宸殿前の庭のこと。「八重ぎくのさける所の名にしおはば今一重をばそへてみてまし」（清輔集・一七三「菊綻禁庭」）のように、元は漢詩文の表現であった「禁庭」が歌題に取り入れられることで、平安後期に宮中の庭を詠んだ歌が見られるようになった。中でも「てもかけぬ雲ゐの花のしたにゐてちる庭をのみわが物とみる」（頼政集・七六「地下にて侍りしに南殿の桜盛に上達部殿上人参りて禁庭花の心を読まれ侍りしに」）は、身分によって立ち入ることができないことに対する詠嘆の歌だが意図するところは当該歌に近く、「南殿の桜が散ってしまった庭」は華やぐ空間から除外された者が眺めるものであったと考えられる。だとすると、当該歌は桜散る庭に踏み入ることができないという詠み方を踏襲しつつ、類推の「ダニ」によって、かつては花盛りに手折ることができた（＝華やぐ空間の成員であった）にもかかわらず、今や桜が散った庭にさえ踏み込めない（＝まして宮中には立ち入れない）と籠居の身の嗟嘆を訴える意図があったと解せるだろう。

【補説】詠者は禁庭の桜を「公私に渡る王権との紐帯」の象徴的な景物として捉え、宮中の庭から排斥された嗟嘆を桜に託し、往時と現在を対比して現状に対する不遇感を詠んでいる。桜が盛りになる時期になっても、花の散ってしまった庭にすら入れない状況に往時との懸隔を感じ、我が身の不遇を訴えた歌と解したい。公光解官については【作者】に述べたように諸説が存し、何らかの理由で後白河院の勘気を被ったと推測されている。解官の理由は不明としておくが、238・239番歌の配列は、表現上の連関のみならず後白河院に排除された者の歌を並べたものであり、編者の企図を窺わせる組み合せになっている。

『言葉集』（恋上～述懐）に収載される公光歌は六首だが、内五首は他出が見つからない。『歌仙落書』『千載集』『玄玉集』にもそれぞれ複数首が取られるが、ほぼ重複しない（『言葉集』『歌仙落書』が一首重複）。近い時代に編まれた撰集に公光歌が取られる様子を見るに、述懐的な歌を集めた家集が存在したのかもしれない。（穴井）

ヨミ人シラス
240　ミレハミ□（ナ歟）ハナノナタテノコトノハヲ
　　カキアツヘツヽイカヽチラサン

【整定本文】

ヨミ人シラズ
ミレバミナハナノナダテノコトノハヲカキアツベツヽイカゞチラサン

【現代語訳】

よみ人しらず
見ればことごとく花の妨げになるような木の葉を、何度も掻き集めては、どうして散らすことができましょうか。同様に、見ればどれもこれも花の評判を落とすような歌の言の葉を、幾度も書き集めて、どうしてお見せすることができるでしょう。

【他出】『有房集』三八六
ふるきみやばらに女ばうあまたしてはなのうたどもよまれけるに、心ならずまゐりあひたりしを、やがてかさねよとせめられつつよみてのち、のこりのうたゆかしきよしを申せば、にようばうのなかより
みればみなはなのなたてのことのはをかきあつめてもいかがちらさむ
○『有房集』（寿永百首本系統）九三
古みやばらに女房あまたして花の歌どもよまれけるに、心ならずまゐりあへりしを、やがて、よきをりなり、かさねよとせめられて、にはかによみてまゐらせてのち、のこりの歌ゆかしき

よし申せば、女房のなかより

見ればみなはなのなたてのことのはをかきあつめつついかがちらさん

【作者】未詳。**【他出】**に掲げた『有房集』によれば、ある宮家に仕える女房。

【語釈】○ハナノナダテノコトノハ　「名立て」は不名誉な評判が立つこと、評判を落とすこと、名折れの意。「花の名立て」の使用例としては、「みるからにはなのなたてのみなれども心はくものうへまでぞゆく」（後拾遺集・春上・九四「南殿の桜を見て」高岳頼言）、「をみなへしさける野辺にぞやどりぬるはなのなたてになりやしぬらん」（金葉集・秋・二三〇・隆源法師）等がある。当該歌では「花」にこと寄せて「言の葉」を用いているのだろう。桜の花を遮ってその美しさを邪魔立てする木の葉と、出来の良くない和歌の言の葉を重ねている。**○カキアツベツヽ**　底本では五字目「へ」に見えるが、歌意を考慮すると「メ」の方が自然である。マ行とバ行の音韻交替（集め／集べ）によるものか。不審は残るが「かき集べ」として解釈した。これには木の葉を掻き集めることと和歌を書き集めることが掛けられている。この掛詞は和歌においてしばしば用いられ、「しぐれつつふりにしやどのことのははかきあつむれどたまらざりけり」（拾遺抄・四二三「天暦御時に伊勢が家の集めしければたてまつるとて」中務）、「このもとにかきあつめつることの葉をははそのもりのかたみとは見よ」（詞花集・雑下・三八〇「むすめのさうしかかせけるおくにかきつけける」源義国妻）のように、家集や詠草が関係する状況で、「言の葉」と組み合わせて詠まれる例が多い。「つつ」は継続・反復を表す。**○イカベチラサン**　反語を表し、「どうして散らそうか、いや、散らせまい」の意。木の葉を散らすことと、詠草を散らす（手放して人目に触れさせる）ことを掛ける。「散る」は「花」の縁語。

【補説】詞書がないため解しにくいが、当該贈答歌は二種の『有房集』双方に収載されており、これら家集の詞書によって詠歌状況と歌意が理解できる。家集によると当該歌が詠まれたのは、「古き宮ばら」に女房が大勢集まって花の歌を詠み合った折のことである。「宮ばら」は、皇女の腹から生まれた人を指す「宮腹」と、宮と呼ばれる人々を指す「宮輩」の二つの意味があるが、ここでは後者の意。同時代の「宮ばら」の使用例を見ると、必ずしも複数の皇族を示すわけではなく、一人の皇族を指す例も多い。また歌林苑を中心として、皇女や后妃などの貴顕女性を指す例も目立つ（小林賢太「覚綱とその家集―「宮ばら」の意味するもの―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第3分冊』五八　二〇一三年二月）。「古き宮ばら」という重々しい表現からは、この宮が代々続く宮家、もしくは年長者という印象があり、年代を考えると鳥羽院皇女あたりを想像したくなる。なお有房の父師行は鳥羽院后美福門院のいとこで、美福門院や鳥羽院に近侍している。また有房自身は鳥羽院皇女高松宮主催の歌合に出詠しており（寿永本有房集・三五、四二、八三）、当該歌の詠歌の場も高松宮邸という可能性もあるか。詠歌状況としては、女房たちが花の歌を詠み合っていた所、はからずも参上した有房にも歌を詠むよう慫慂があった。この求めは女房衆からかもしれないし、宮家の主人からかもしれない。要請に従って詠歌した有房が、女房たちの歌も見せて欲しいと求めたところ、女房の一人が返したのが当該歌である。一人の女房が個人的に贈ったというよりは、女房集団の代表として詠歌したのであろう。歌は、一首全体が「葉」のイメージでまとめられており、「葉―掻き集め―散らす」という植物の文脈と、「言の葉―書き集め―散らす」という詠草の文脈とが二重になっている。「花の美しさを十分詠むことができず、花の評判を落とすような歌ばかりですから、到底お見せすることはできません」と自分たちの歌を謙遜している。

（小林）

返　　有房朝臣

241　キミタニモハナノナタテトイフナラハ
　　ワカチラシケムコトソクヤシキ

【整定本文】　返　　有房朝臣
キミダニモハナノナダテトイフナラバワガチラシケムコトゾクヤシキ

【現代語訳】　有房朝臣
あなたでさえ（お詠みになった歌を）「花の名立て」と言うのでしたら、私が書き散らした事など本当に悔やまれますよ。

【他出】『有房集』三八七
　かへし
きみだにもはなのなたてといふならばわがちらしけんことぞくやしき
○『有房集』（寿永百首本系統）九四
　かへし
きみだにもはなのなたてといふならばわがちらしけんことぞくやしき

【作者】源有房→341**【作者】**

【語釈】○キミダニモ　「君」は贈答相手の女房。あるいは女房集団や宮家全体を指すか。「だに」は、せめて～だけでも、～さえの意。ここでは後者。「きみだにもこんといひせばぬば玉の夜床に玉をしかましものを」（久安百首・二七四「恋二十首」教長）、「わがこふる君だにもこば庭の雪にいくらのあともただつかばつけ」（拾玉集・九五一「一日百首」恋）等のように、比較的恋の歌での使用例が多い。**○イフナラバ**　断定の助動詞「なり」の未然形に接続助詞「ば」がつき、順接の仮定条件となる。当該歌ではその中で修辞的仮定とも呼ばれる使用例で、既に起きている現実の事実を仮定条件的に表現する用法。「言ふならば」は口語的な表現のためか、和歌における使用例はそれほど多くなく、当該歌を含めて八首ほど。そのうち「のちのよをあはれときみがいふならばしなむいのちもなにかをしまん」（隆房集・五〇）、「ここをさもあらぬ人ぞといふならば我も名をこそかへて尋ねめ」（林下集・八五三「改名蔵恋同」）など、有房と同時代の詠が半数を占める。**○ワガチラシケンコトゾクヤシキ**　「我が散らしけむ事」とは、自身が歌を書き散らした事、ひいてはその歌の内容、出来映えを指す。「こと（事）」には「言」を響かせ、贈歌の「言の葉」と対応させている。「散らし」も、贈歌の結句「いかが散らさん」を取り込んだ表現で、かつ贈歌同様「花」の縁語となる。「ぞ～くやしき」で係り結びとなっている。

【補説】240番に対する有房の返歌。自分たちの詠歌を謙遜して「花の名立て」と表現する女房に対し、「あなた（方）が詠んだ歌ですら花の名折れだというなら、拙い私の歌など本当に取るに足らないものです」とさらに卑下し、自らが書き散らした和歌の出来映えの悪さを後悔してみせている。なお、当時「源有房」という同姓同名の人物が二人いたことは341番**【補説】**に記したが、当該歌では「朝臣」とあるため、正五位下で終わった顕仲男の有房ではなく、四位に昇った師行男の有房で間違いなかろう。　（小林）

頼政朝臣鳥羽殿ニサフラヒケル
ニ宿所チカ〳〵ナリケルニ花ノ
エタニツケテツカハシケル
　源光信

242　ミナ人ハオナシコスエノハナヽレト
　ニホフアタリノナツカシキカナ

【整定本文】
頼政朝臣鳥羽殿ニサブラヒケルニ、宿所チカ〳〵ナリケルニ、
花ノエダニツケテツカハシケル　　源光信
ミナ人ハオナジコズエノハナヽレドニホフアタリノナツカシキカナ

【他出】『頼政集』六八一

鳥羽院にさぶらひし時光信がもとより桜の花をつかはしてみなもとはおなじ木末の花なればにほふあたりのなつかしきかな

【現代語訳】

頼政朝臣が鳥羽殿に祇候していた折に、（互いの）宿所がごく近かったので、（桜の）花の枝に添えて送った　源光信

（あなたも私も）皆、同じ（摂津源氏から枝分かれした）梢に咲く花ではありますけれど、華やかに咲き匂う桜花の辺りに心惹かれるように、権勢を誇るあなたの側に寄り（余慶に与り）たいものです。

【作者】源光信。清和源氏光国男。母は左衛門尉藤原家実女。寛治七年（一〇九三）～久安元年（一一四五）。元永二年（一一一九）正月に検非違使宣旨を受け（この時、左衛門少尉）、以後、活動が残る。大治二年（一一二七）一〇月までに叙爵。白河院に仕え、為義らと共に内裏の宿直を命ぜられた。また、『尊卑分脈』には、「鳥羽院四天王其一也」と記される。大治五年（一一三〇）、私兵を率いて、藤原忠実邸を襲撃し、かくまわれていた源義親を名乗る人物を殺害した廉で土佐に配流された。康治二年（一一四三）召還され還任（この時、従五位上）したが、久安元年一〇月四日頓死。「土左判官」と呼ばれた。その男光重は仲正の養子となっており（尊卑分脈）、頼政とは単に同族という以上に親密であったと考えられる。光信には、この頼政との贈答以外に和歌事績は残らないが、『夫木抄』に、「近衛院因幡、光信女」の作者名のある歌が見え（九五五八番、詞書「家集」。同じ歌が『今撰集』九三に「関路紅葉」の詞書、作者名「近衛院因幡」として入る）、光信の女には和歌事績があったようだ。《参考文献》宮崎康充「古代末期における美濃源氏の動向」（『書陵部紀要』三〇、一九七八年二月）、元木泰雄「摂津源氏一門―軍事貴族の性格と展開―」（『史林』六七―六、一九八四年一一月）

【語釈】**○頼政朝臣**　源頼政。↓219【作者】**○鳥羽殿**　洛南鳥羽、鴨川と桂川が合流する地点に造営された離宮の総称。現在の京都市伏見区竹田・中島両地区に位置する。応徳三年（一〇八六）、白河院譲位後の御所（後院）として構想されたが、その後、白河・鳥羽院政期を通じて造営が継続し、南殿・北殿・泉殿・田中殿等の御所のほか、証金剛院・成菩提院・勝光明院・安楽寿院・金剛心院等、御所に付随する御堂が建立された。白河院の遺骨は成菩提院に納められたが、鳥羽院は安楽寿院を自らの終焉の場所と定め、保元元年（一一五六）七月に同院で没した。《参考》美川圭「京・白河・鳥羽院政期の都市」（元木泰雄編『院政の展開と内乱』吉川弘文館、二〇〇二年）。**○宿所**　鳥羽殿に祇候する間、宿としている場所。鳥羽殿が白河院の後院として構想された際に近習の卿相侍臣や地下の雑人等がそれぞれ屋地を賜ったことが『扶桑略記』に見える。**○チカ〳〵ナリケル**　光信と頼政の宿所がごく近い距離にあったことを示す。**○花ノエダ**　『頼政集』は「桜の花」と明示する。**○ミナ人**　すべての人。ここでは、「世にある人すべて」の意ではなく、「あなた（頼政）も私（光信）も皆」といった内容であろう。『頼政集』では初句「みなもとは」とするが、「皆もとは（あなたも私も元来は）」の意に、氏の名の「源」を隠題として詠み込んだ表現と考えられる。返歌との照応を勘案すれば、当初「みなもとは」とあったか。**○オナジコズヱ**　光信と頼政が、同じく源頼光（満仲男）を祖とする摂津源氏に属する間柄であることを示す。頼光男頼国の息であった頼綱（頼政祖父）と国房（光信祖父）からそれぞれ多田源氏と美濃源氏に分かれたのを、幹から枝分かれした梢に喩えた表現。「同じ梢」は、平安後期以降に見える表現で（勅撰集初出は続拾遺集）、「柴の戸にあまやどりせよ郭公かよふかきねもおなじこずゑを」（散木奇歌集・二四六）等の例が残るが、当歌のように「同族」の表徴

として用いた例は他に見えない。冷泉天皇の皇子敦道親王が兄為尊親王と自らについて、「おなじえになきつつをりし郭公こゑはかはらぬ物としらなむ」（和泉式部集・二二七）と表現した、「同じ枝」の措辞が用法としては近い。**○ハナヽレド**　『頼政集』の諸伝本はすべて「花なれば」とする。「花なれど」であれば、「同族ではあるけれど、現在の公的な活躍ぶりには隔たりがある」ことに焦点が当たり、「花なれば」であれば、「現時点での公的立場には格差があるが、同族ゆえの親密さを求める」心情が強調される。**○ニホフアタリ**　桜の花が咲き匂っているその周辺。「匂ふ」は、ここでは、「桜が色美しく咲き誇る」意と、「権勢を得て栄える」意を持ち、後者の意により、時宜を得て治天の君に取り立てられた頼政を指す。「花」と「匂ふ」の語の連関により、「同じ桜花の中でも他よりいっそう美しく誇らかに咲いている」光景が喚起され、頼政の受ける恩顧が華々しいものであることを示唆する。**○ナツカシキカナ**　「懐かし」は、人以外の事物を対象とする場合には、愛着を示す語として、「吹く風のなつかしきかなこのさとに花たち花の匂ふなるべし」（堀河百首・四五七「廬橘」師時）のように「心惹かれる」意で用いられる。また、人を対象とする場合には、親愛の情や親近感を示す語として、「いかでかとおもひしいもがありさまはかたる人だになつかしきかな」（六百番歌合・六二九「聞恋」兼宗）のように用いられるが、その例は少ない。ここでは、美しく咲く桜への執着や耽美の情にこと寄せて、公から重く用いられ活躍する頼政に親近して、院からの恩顧に与りたい希望を述べたものと推測される。

【補説】この歌の詠作年次は、光信が土佐に配流される大治五年（一一三〇）以前、または、召還された康治二年（一一四三）～没年の久安元年（一一四五）の間に限定される。光信は「白河院四天王」と称され（尊卑分脈）、内裏の警護を白河院から命ぜられるなど（愚管抄・巻四）、土佐配流以前は頼政に較べ、社会的地位が遙かに高く、重用もされていた。頼政は光信の配流中に白河院判官代から六位蔵人を経て叙爵する。光信が頼政を咲き誇る桜に喩えて、すり寄るようなやや卑屈な詠みぶりを示していることを考えると、召還以後の可能性が高いか。なお、242番歌詞書では、頼政は「鳥羽殿」に祇候していたとするが、『頼政集』では「鳥羽院」に祇候していたと記す。当歌の詠作時が光信の召還以降であるとすれば、鳥羽殿に居た治天は鳥羽院となるが（白河院は大治四年七月七日没）、「鳥羽殿」への祇候と、「鳥羽院」への祇候とでは、院との関わり方の親疎に差があろう。頼政には鳥羽院北面歌合での詠が残り、鳥羽院に親近していたことは確実だが、仮に『言葉集』の詞書が本来の形であったとすれば、『頼政集』は鳥羽院との関係をより密接なものとして表現しようと意図したことになろう。（中村）

返　　頼政朝臣

243　ケニヤミナモトハヒトツノハナヽレハ
　　スヱ〳〵ナリトオモヒハナツナ

【整定本文】　返　　頼政朝臣
ゲニヤミナモトハヒトツノハナヽレバスヱ〳〵ナリトオモヒハナツナ

【現代語訳】　返歌　　頼政朝臣
あなたのおっしゃる通り、（あなたと私は）皆、元は（「源氏」という）一つの（根から咲いた）花なのですから、（祖先からはるかに遠ざかった）末裔だからと言って、（ご自分のことを）思い捨ててしまったりしないでください。

【他出】『頼政集』六八二
　返し
げにやみなもとはひとつの花なればするゑずゑなりと思ひはなつな

【作者】源頼政→219【作者】

【語釈】〇**ゲニヤ**　「げに」は他人の意見に納得し肯定する表現。いかにもその通りだ。光信歌の「みな人は同じ梢の花」、すなわち、光信と頼政が同族であることを肯定している。「や」は感嘆を示す間投助詞。〇**ミナモトハヒトツ**　「皆、元は一つ」の表現に、氏の名「源」を隠題にして詠み込む。「元」は木の根や株を指し、枝の先端を意味する「末」と対となって縁語を形成する。〇**ハナヽレバ**　光信に対し、「あなたも花として咲いているのだから」の意を込める。〇**スヱ〳〵ナリト**　末裔だというので。「末々」は、「元ー末」の縁語が形成する樹木のイメージにより、「根幹から伸びたはるか先端」の意を取り、「子孫、後裔」と解した。この意で用いた作に、「石清水きよきながれのすゑずゑに我のみにごす名をすすがばや」（小侍従集・一六九）の例がある。〇**オモヒハナツナ**　「思ひ放つ」は思いをきっぱり捨てる意。

【補説】鳥羽院の恩顧を得た頼政に対して、その余慶を得るために接近を図る歌を詠みかけた光信に、互いに清和源氏の末裔ではあるが、自分自身のことを断念するなと力づける歌と解した。なお、「末々」には、右の解釈で採用した「後裔、子孫」の意の他に、「地位や身分が低い下々の者」の意もある。この意を採るならば、下句の内容は「お互いに元の幹からは遠く隔たった梢の先に位置するが、身分が低いと思って自分を切り捨ててしまったりするな」と解釈できる。（中村）

三□(月歟)ハカリワツラフ事侍ケルニ
人ノモトヘツカハシケル
源有房朝臣
244　オシカラヌイノチナレトモハル□(ノ歟)□(ヽ歟)ハ
ハナミニノ□(ニ歟)ソイカムトハオモフ

【整定本文】
三月バカリワヅラフ事侍ケルニ、人ノモトヘツカハシケル
源有房朝臣
ヲシカラヌイノチナレドモハルノヽハハナミニノミゾイカムトハオモフ

【現代語訳】
三月のころ、病にかかることがありました時、ある人の元へつかわした歌
源有房朝臣
失うのが惜しくない命であるけれども、春の野というものは、花見にだけは行こうと思うし、その花見によってのみ生きようと思うのである。

【作者】源有房→341【作者】

【語釈】〇**人ノモトヘ**　「人」が、具体的に誰を指すか不明だが、歌本文の下句から、ともに花見を行きたいと伝える歌ともとれるため、比較的親しい間柄と考えられる。〇**ヲシカラヌイノチナレドモ**　「惜し」とは、人やものに対して愛着があるために、それを失うのが辛く感じられること。「をしからぬ」の「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。先行例として、「をしからぬいのちなれどももろともにいかまほしきはいきの松ばら」（弁乳母集・一〇七）が挙げられる。弁乳母詠は、右大弁の上が筑紫に下る際に贈った歌で、「いかまほしき」の「いく」、「生の松原」の「生」ともに、「生く」「行く」が掛かっており、惜しくない命ではあるけれども、右大弁の上とともに筑紫に行きたい（生きたい）と願っている。詳細は後述するが、当該歌の「いかむ」も同じ掛詞が用いられている。他にも類歌として、「きみがためをしからざりしいのちさへながくもがなとおもひぬるかな」（後拾遺集・恋二・六六九・義孝）、仏教の無常観によせ

た「をしからぬ命ぞさらにをしまるる君がみやこにかへりくるまで」（千載集・雑中・一一三二・成通）などがあり、いずれの歌も「ども」、「さへ」、「さらに」を用いて、惜しくない身の上だったものが、生きたいと考えるようになった事情や心情を下句で述べている。言葉の上では、生には執着せず、手放してもよい命であることを前提にしているが、却ってそれは、それぞれの理由によって命が惜しいという心の内を表現している。また、義孝詠と同じく恋愛の辛さや嘆きを詠んだ歌に「をしからぬいのちなれども心にしまかせられねばうきよにぞすむ」（伊勢集・二〇六「世中のうきことを」）があるが、「憂し」という遁世観が「惜しからぬ命」へと繋がっている。当該歌において、病を患ったことが、命を惜しくないと考える契機になったか分からないが、病が詠者の無常観や遁世観をより掻き立てたと考えられる。**〇ハルノヽハ**　下の句にある、花見の場所を提示している。「野」は平らな土地を指し、「春の野」には、若菜やすみれ、茅花など比較的背の低い植物が茂る。花（桜）は、「春ののにわかなつまむとこしものをちりかふ花にみちはまどひぬ」（古今集・春下・一一六・貫之）や「みちとほみものうしとおもふ春ののもはなみるときぞこころゆきぬる」（好忠集「くれの春、三月上」六六）から分かるように、「春の野」ではなく、野に行く道中で見るものだったらしい。好忠詠は、花見が心の鬱屈を晴らすものとして詠まれているが、当該歌でも、花見が生きる願望を生んでいるため、花見に対する心持ちは近いものがある。なお、野の桜を詠む歌は数少ないが、他には「花すすきまねきしよりもはるののにたてるさくらぞひととどめける」（為忠家後度百首・桜廿首「野径桜」三七・為業）のような歌が見られる。**〇ハナミニノミゾ**　花見は花を観賞すること。多くは桜を見ることを指した。当該詠も、三月に詠まれているため、桜の花見であると考える。「のみぞ」によって、失われてよい命であっても、花見にだけは、という強い願望が込められている。**〇イカムトハオモフ**　「いく」の未然形「いか」は、「行く」と「生く」の掛詞で、花見にだけは行こうとする意志と、花見があることによって生きようと考える、二つの文脈を持つ。「いかむ」の「む」は意志の助動詞。「とは」の「は」は、「いかむ」を限定している。四句目の「のみぞ」と重なることで、花見に行くことだけが、惜しくない命の中で生きたいと思える唯一の要素であり、また花見が生きることへの執着に繋がっていることが強調される。類似の表現として、「みやこにもこひしき人のおほかればなほこのたびはいかむとぞおもふ」（後拾遺集・恋三・七六四・惟規）が挙げられる。

【補説】毎年同じ時期に咲き、散ったり枯れたりする花は、季節や時の流れを感じさせるものであるため、自らの寿命を意識させ、限りある命の惜しさを掻き立てるものであった。「さきにけりはなみむまでのいのちともおもはでうゑしやまとなでしこ」（有房集（宮内庁書陵部蔵）・一〇三「わづらひはべりしころ、なでしこのたねをまきてのち、ほどへてはなのさきたりしをみて」）は、当歌と季節は異なるものの、病を患った際、撫子の花を通して植えた過去と今とを比べ、花を見ることでもうこれまでの命であることを自覚している。有房が、花を巡って自らの命を強く意識していることが分かる。そしてまた、「花―命」が深い繋がりを持って詠まれるのは、花が命と同じく、いずれは失われる、儚い存在であるからだろう。「身にかへてをしむにとまる花ならばけふやわがよのかぎりならまし」（詞花集・春・四二・俊頼）は、我が身の惜しさと、身を換えても、花を散らさないとする花への執着の両方が窺える歌である。「花―命」の歌には様々な方向性があるが、花が人の生や命を強く意識させる存在であったことは間違いない。

（持田）

A Commentary on "*Genyo shu*"

Kenta KOBAYASHI, Jun ANAI*, Aya NAKAMURA** and Rei MOCHIDA***

Accepted November 14, 2023

抄録：『言葉集』は平安時代末期に惟宗広言が編纂した私撰集である。本稿は冷泉家時雨亭文庫蔵本を底本として、『言葉集』雑部上 238 ～ 244 番に注釈を施した。当該範囲の歌の作者は、藤原惟方、藤原公光、源有房、源光信、源頼政などである。詞書には崇徳院、八条院暲子内親王、鳥羽殿など、院政期の政治や文学を考える上で重要な人物や場所も記されている。和歌の語釈や現代語訳に加え、当時の政治状況や文化的環境も踏まえて注釈を試みた。

索引語：和歌、惟宗広言、私撰集、平安時代末期、雑部上

Abstract: The "*Genyo shu*" is a Shisenshu (personal collection of poetry) compiled by Koremune Hirotoki in the late Heian era. This paper is based on "the Reizei Shigure-tei Series" and annotated the waka poems numbered 238-244 in the "*Genyo shu*". Waka poems by various poets are recorded in this range. These Kotobagaki (captions) describes important people and places in the politics and literature of the Insei period (during a period governed by a Retired Emperor). We have provided detailed explanations of the words and modern translations of the waka poems. In addition, the political situation and cultural environment of the time were taken into consideration and annotated.

Key Words: *waka*, Koremune Hirotoki, shisenshu(personal collection of poetry), late Heian era, first half part of miscellaneous subjects

* 埼玉学園大学人間学部

** 元埼玉学園大学人間学部

*** 日本女子大学文学研究科日本文学専攻